

いては、格別深い考慮を費すまでもなく定め得られる所であらう。即ち上述の如く景教々義を、當時唐室の重んじた老子の教と近からしめようと努めたと思はるゝ時に、かゝる經典を以て、景士の一人の選述となすよりも、その原典が存在して、それを譯出したものであるとすることが、著しく効果のあるべきは言ふまでもないことである。こゝに於てか繰り返していふが、此の經はこのまゝの原典が所謂大秦國、若しくは其の他の西土に於て存在したのを、景淨が譯出したのでは無く、景淨が唐に於て景教の傳統的態度方針に依りて、基督教の聖典に據を求めつゝ、態と道德經の精神に似通はしめて選述したものに外ならぬのを、故意に譯出とし、従つて經目にも同様に景淨の譯としたのに外ならぬであらう。但し譯といひ選といふも、見方によつては必ずしも絶對的に區別し得べきではないのであつて、或る原典をそのまゝに譯出しないまでも、基督經聖典に含む内容をそれこれ取出して、これによつて漢文の經典を作つたとすれば、それも一種の譯といふを妨げないと謂ふものがあるかも知れない。若し果してそう言ひ得るならば必ずしも譯の語に拘泥しようとは思はないが、それにしても前に引いた跋に、「謹案諸經目錄、大秦本教經都五百三十部、並是貝葉梵音、……後召本教大德僧景淨、譯得已上三十部、卷餘大數具在貝皮夾、猶未繙譯」とあるのを正解したものと認めることは出来ない。此等三十部(實は三十五部)の所謂譯出經典の中には、題目から判斷しても、疑も無く基督教聖典をそのまゝに翻譯したに相違ないと思はるゝもの、例へば多惠聖王經、阿思(萬?)瞿利容經、寶路法王經、牟世法王經の如きを始め、この類の經名が多く、また三威蒙度讚や一神論の如きも、性質上純眞の基督教經典なること固より疑ふべき餘地はないが、其の間に伍して、甚だ性質を異にして居ると考へらるゝ此の志玄安樂經の發見されたことは、重要にして且つ興味深きことと言はねばならぬ。自分はこゝに景教碑文を